

246
58
183

教波
兼平
汗手
率都
紅葉符

白宗家
觀世
心印

難波

兼平

千手

平都婆町

紅葉狩

難波

山主人ツマ 覆フクて浦ウラの津ツく浪なみ内うち静しず

ありきりラ 柳ヤナギ是こゝを當あた今いまよりヨ

かへしむるカ下した也なり我われ三さん徳とく野のを信まト

毎まい年としよりここよりはは下した此こゝ度たびの可よ紀き

成なり物もの一いつ年としよりは多おほ喜よろこぶも成なり物もの

今いま都みやこより下した向むかは作し 春はる立たちやあ実み



難波

そらどけきつるあまのうぐはしの
生所も吹上の浦傳ひて行程の
ゆきも紀路の關越て是を都ら
津乃國の種取は其のまきりく
君が代乃あがら乃橋もつらあり
波乃まも幾久し
冬籠りいふまの亂るるバ 久天

長く地久敷るく神代の長岡は
つらあり皇乃かこまき代乃道は
うく國せめく民をさめて四方は
ハ鳴の浪おる照を日の本守の敷
成時とらや
萬代を祝福あるは
あまのうぐはしの調わ

雄皮

かきよもまもあぢ路の直あるは代を
あまづもあぢ路の直あるは代を
まもあぢ路の直あるは代を
早成老人の尋ねるは代を
方々のあぢ路の直あるは代を
あまづもあぢ路の直あるは代を
梅の牙陰をまもあぢ路の直あるは代を

賞讃し給ふは代を
ボウとてあぢ路の直あるは代を
乃人まもあぢ路の直あるは代を
つてあぢ路の直あるは代を
ボウとてあぢ路の直あるは代を
あぢ路の直あるは代を
まもあぢ路の直あるは代を
あぢ路の直あるは代を

乃兄とよみしつり^{ミテ}其上梅の名可く
 國と可らみきた^シ六義の始のり
 哥^シも新波の梅とて獲せり
 此代も^{ツカ}しら^カき^ル榮花と^シて^ハあり
 物と花の佳^カい^ニも^ハあ^リあ^リも
 乃國^ノ業^ノも^ハあ^リあ^リも^ハあ^リあ^リも
 え^ニく^ニあ^リあ^リも^ハあ^リあ^リも

事^ニあ^リあ^リも^ハあ^リあ^リも^ハあ^リあ^リも
 の梅^ノも^ハあ^リあ^リも^ハあ^リあ^リも^ハあ^リあ^リも
 成^ルも^ハあ^リあ^リも^ハあ^リあ^リも^ハあ^リあ^リも
 波^ノも^ハあ^リあ^リも^ハあ^リあ^リも^ハあ^リあ^リも
 と^ハあ^リあ^リも^ハあ^リあ^リも^ハあ^リあ^リも
 歌^ノも^ハあ^リあ^リも^ハあ^リあ^リも^ハあ^リあ^リも
 せん^ノも^ハあ^リあ^リも^ハあ^リあ^リも^ハあ^リあ^リも

唐國の堯舜の徳に
方板のまじりごと
意悲の浪四海は普く
おまたひらぬ 君も
水よく船せうのぶと
よのぼりてみまは煙
さるぎのまじりごと
ヤラ

わが
汝君の代りたぬ
貧窮をみまはる
三年は調物
極すれは浪の
ておの豊年
あらしもまじり
ヤラ

のまへへ舞樂さうり給ふま
我の知もや汝梅の春年ごの花の
精地と人チの老人カ今を顯シテを
難波津ノ日ヒ笑スやこの花と縁ヅつ位を
まゝ申キ百濟國ハクセの王ワ仁ニあれや
とト此コをレ戯シきキ樂シりノ声コエ
さう舞の管の舞の曲おもひづら

慰めやへも下座して給入花の
志シのシ待マ入ル早早上上書書かカてテ舞ヒ
花の志のシ更ニあリてテ月影ツキカゲ
ともト聞クなるル舞ハぬル交ハりテ音ネ樂ガク乃ハ
花ハはハ坊ハさシびシはハいハくク
しシのシ舞ハのシ東トのシ舞ハはハいハらラ
は南枝花初ハて聞ク愛ハりシ可シ也也西ノ海ノ水ノ

向ふ難波の夢のお若月さきまむ
浦乃浪よるたぐくの面白や多む
志多しはなふ見の難波の浦
よ年をくぐりたる侍の恵みを
受ぬ本華用耶姫の神宮あり
秋き赤白海國より此國へ渡り君
もほらぬ國を身する仁とらぬ
権人

あり上地、ニニ
の鏡乃影をうけ治まるそのの榮苑
をあり志毛洗初の匂ひまじり開る
このものろみさるも難波のりかほあり
ぬ遊び戯まがめは舞樂をまじりわ
梅枝よさるる管鳥妻りけく
あまを
あまを

地 板頭乃曲の如くうづら入目を招ま
 せひまきましく今乃太鼓の浪あねを
 よりそへうちかたるりきうちり此音
 樂はいつきつる人世代は又出天下を
 守りたまむる天下を守りて治る萬
 籟樂さうあていさく

無平

第ニザニ
 始々旅を信濃路をく才曾乃
 行魚を専念 是乃才曾の出家
 より出てる僧として作梅才曾殿の
 白洲ありつづの原をく果終ひたる由
 歌女の程よは出跡を弔ひやうとつやと
 村のひびく栗津の原へと急作

信濃路やまじろのき橋なすあ
ぐ其跡も道への草の陰
た野の槐おも重ねつ自を添てゆ
まが程あくぬ路や矢橋の浦は遠
よきりく世あることこのまを
牙より昔を染めたりぬせよのころる
後ニシテあすニシテ其船は便船やらう

あすニシテ光の山ヤバセ矢橋乃渡りあす
もあは流る果積たる舟よの程
よ便船ニシテあすニシテまニシテこあも染め
とんやうてくた折節渡りよ舟よあ
志出家ニシテたニシテりニシテあニシテてニシテゆニシテハニシテ別ニシテ乃ニシテ法ニシテ利ニシテ益ニシテよニシテ舟
を渡ニシテてニシテくニシテびニシテ舟ニシテ入ニシテるニシテもニシテくニシテ出ニシテ家ニシテ乃ニシテ法
牙あたるよの人の習りたよへー。又は

經手も如渡得ぬ 舟ゆえたる旅幻
なれ かの舟もいかに海の
多々橋を渡る舟あらざる旅人の舟
舟也 是のまゝ浮世をわする染舟
舟く干されぬ袖も三軒棹はかたお
まぬ人なれば法の人あてまぬ舟を
舟よばいぞ惜しくもなへてあなれ

舟く 舟高 舟行の舟頭殿よりまゐりて
みづ邊の舟の浦には舟の舟あてて
舟の舟は教へ 舟の舟は舟の舟あてて
舟の舟は教へ 舟の舟は舟の舟あてて
舟の舟は教へ 舟の舟は舟の舟あてて
舟の舟は教へ 舟の舟は舟の舟あてて
舟の舟は教へ 舟の舟は舟の舟あてて
舟の舟は教へ 舟の舟は舟の舟あてて
舟の舟は教へ 舟の舟は舟の舟あてて
舟の舟は教へ 舟の舟は舟の舟あてて

乃人家を眺めくまへての梅は乃
 比叡山の城よりうらまらに當りての
 よあや中への事なき我らの城
 乃鬼門を穿つ悪魔を松のまへらに
 一松葉の影を申す侍の御身のまへを
 かくれしや又天香山と号する震旦の
 四明の洞をうらまを傳教大師拒き

天玉とせばおまへはきつは暦年
 中乃清草の影を我つ松と詠はる
 一松本中堂乃山と名に疎ゆを
 て作梅は入宮乃法在可き
 とあらんもほ乃坂本うちきてはり
 はまの林麓の當りて女こゆるまの陰
 のみら社大宮の清在可き

森きちりく成て強きまの波の音
あづられ山楸の青紫して面影も夏
山乃うつゆき海の榮紅の志づく
も暇そ惜まけりあかしのよきま
穢まの葉は早く落つるなり
露をり敷きまて目も暮あ
も成らる葉はの原をさすあ

陰いざも吊らましく白奴ほひ
を碎き音も眼晴をやり紅波たて
を流せよう初ひ能は結花を乱も
雲氷の葉津の原の初ひな
をりそよ聲もよ修羅のちあたき
さぐりやあ葉津の原乃
草枕の甲冑を帯りみよあ

成人おしりま^{シテカル}度き^{シテカル}り^{シテカル} ありの^{シテカル}と^{シテカル}尋
けお^{シテカル}水^{シテカル}脚^{シテカル}才^{シテカル}具^{シテカル}是^{シテカル}迄^{シテカル}来^{シテカル}り^{シテカル}の^{シテカル}後^{シテカル}も^{シテカル}我^{シテカル}お
し^{シテカル}迄^{シテカル}と^{シテカル}り^{シテカル}し^{シテカル}馬^{シテカル}入^{シテカル}指^{シテカル}さ^{シテカル}す^{シテカル}ま^{シテカル}度
き^{シテカル}び^{シテカル}や^{シテカル}。^{シテカル}無^{シテカル}平^{シテカル}是^{シテカル}迄^{シテカル}来^{シテカル}り^{シテカル}た^{シテカル}も^{シテカル}。^{シテカル}し^{シテカル}井^{シテカル}
笠^{シテカル}頭^{シテカル}無^{シテカル}平^{シテカル}の^{シテカル}今^{シテカル}の^{シテカル}後^{シテカル}も^{シテカル}お^{シテカル}し^{シテカル}り^{シテカル}な^{シテカル}り
借^{シテカル}り^{シテカル}夢^{シテカル}又^{シテカル}さ^{シテカル}す^{シテカル}有^{シテカル}出^{シテカル}発^{シテカル}し^{シテカル}。^{シテカル}い^{シテカル}ち^{シテカル}か^{シテカル}ら^{シテカル}ぬ^{シテカル}愛^{シテカル}
の^{シテカル}こ^{シテカル}り^{シテカル}現^{シテカル}も^{シテカル}も^{シテカル}た^{シテカル}ら^{シテカル}も^{シテカル}あ^{シテカル}ら^{シテカル}し^{シテカル}掉^{シテカル}の^{シテカル}お^{シテカル}も^{シテカル}く

カ^{シテカル}の^{シテカル}え^{シテカル}も^{シテカル}借^{シテカル}り^{シテカル}早^{シテカル}く^{シテカル}も^{シテカル}お^{シテカル}し^{シテカル}り^{シテカル}の^{シテカル}ち^{シテカル}引^{シテカル}
も^{シテカル}や^{シテカル}毎^{シテカル}日^{シテカル}て^{シテカル}み^{シテカル}え^{シテカル}と^{シテカル}の^{シテカル}矢^{シテカル}橋^{シテカル}の^{シテカル}浦^{シテカル}は^{シテカル}渡^{シテカル}
身^{シテカル}の^{シテカル}身^{シテカル}取^{シテカル}入^{シテカル}こ^{シテカル}う^{シテカル}無^{シテカル}平^{シテカル}ら^{シテカル}現^{シテカル}も^{シテカル}カ^{シテカル}の^{シテカル}
え^{シテカル}の^{シテカル}後^{シテカル}も^{シテカル}は^{シテカル}ら^{シテカル}し^{シテカル}が^{シテカル}社^{シテカル}始^{シテカル}より^{シテカル}操^{シテカル}ある^{シテカル}
人^{シテカル}と^{シテカル}み^{シテカル}え^{シテカル}つ^{シテカル}ら^{シテカル}ぬ^{シテカル}毎^{シテカル}日^{シテカル}は^{シテカル}毎^{シテカル}人^{シテカル}の^{シテカル}身^{シテカル}人^{シテカル}
も^{シテカル}も^{シテカル}あ^{シテカル}ら^{シテカル}ぬ^{シテカル}無^{シテカル}平^{シテカル}ら^{シテカル}あ^{シテカル}ら^{シテカル}ぬ^{シテカル}身^{シテカル}人^{シテカル}矢^{シテカル}橋^{シテカル}の^{シテカル}浦^{シテカル}は^{シテカル}渡^{シテカル}
出^{シテカル}乃^{シテカル}矢^{シテカル}橋^{シテカル}の^{シテカル}浦^{シテカル}は^{シテカル}渡^{シテカル}身^{シテカル}人^{シテカル}矢^{シテカル}橋^{シテカル}の^{シテカル}浦^{シテカル}は^{シテカル}渡^{シテカル}

無平

七

七渡一守とみえし我ぞあり同敷
此舟と法乃舟引入て我をま
た彼舟よりわたりてたをを給るや
名有為生氣のちも寝つて去り
りや老女もつる前及不同夢幻泡
影行まあらん 唯是權花一月の榮
弓馬の家よきを月つづらふあ

兵乃七渡と成る女曾ぬ此江
路を下りてふ 萬年御田のりありあ
ひて又三百年後乃成ぬ 此のち合
戦きびくまて又主後二騎よりちあ
きぬ今うかあり 何の松原はあゆま
が腹をけりて 萬年すあやき
わうたも後二騎 粟津乃松原さ

の山内へ雲々く霧をまらねたりありあや
しや通路へ来たら宮のうも氷澤田
よ馬をかまねくひまはほくらびうて
ともゆらぬを月影のうらぬを見え
たそこき行とあらんやれ果せん方を
あくあきねさくぬまの自書さざらや
とて刀の手に掛おひらぐらるるてを

急平が行魚めりみしき方のかつをえ
うらと給入るづらうらりきりきん今
そ命のつらうらつ笑あつ来てうち甲
よからあつらぬらつ手あてますませら
だまりもあつら馬よりのちちらちら
きとある所の愛ぞ秋よるとを主君の
は歸せぬ入用ひてきりぬら
突痛

と押サヨスルひらビトらビトをハルみハルまハルのハル遠ハル風ハル白ハルひハルくハルるハル花ハル
れ都サヨスル人ビトよハルまハルづハルらハルみハルえハルまハルをハルうハルやハル
東アサマのハル早ハルいハルきハル人ハルのハル心ハルれハル奥ハル深ハル三ハル其ハル情ハル結ハル
勢ハルあハルまハル花ハルのハル喜ハル紅ハル紫ハルれハル秋ハルたハルがハル思ハルひハルてハル
ありハルぬハル後ハルいハルうハルはハル千ハル手ハルのハルあハル耶ハル見ハル自ハル地ハル
まハルづハルつハルるハルおハル家ハル乃ハル清ハル暇ハルのハルりハルきハルらハル後ハルほハル
きハルうハル社ハル々ハル入ハル女ハル向ハルはハルきハルらハル基ハル由ハルりハルてハル入ハルるハル勢ハル

歎ナキはハルあハルらハルあハルをハル私ハルらハルしてハルおハル家ハルとハル絆ハルやハル
えハルらハルのハル思ハルひハルまハルよハルらハルらハルとハル社ハルひハルひハルつハルまハルわハルらハル
りハルもハル心ハルのハル内ハル押ハルらハルりハルまハルるハルまハルきハルてハルおハル家ハル
程ハル一ハル層ハルくハルこハルもハルくハルてハルおハル家ハルひハルあハルまハルおハル家ハル
れハルはハル智ハルをハル痛ハルりハルうハル社ハル々ハル入ハル口ハル惜ハルやハル我ハル一ハル
答ハルあハルてハルらハルもハルもハル成ハル入ハルまハルるハル乃ハル生ハル捕ハルまハルきハル
今ハルのハル東ハル乃ハル果ハル送ハルもハルがハル様ハル又ハル面ハルとハル出ハルらハル

千手

五

はと前世の報しと云あづらう又思
むも父念ふより仏像と云人壽
をたまり現當に罪を果はる前業
より報もつう結ゆ一室と乞の
は理りまあづらもまため一吉入るよ
多き習ひと云物を獨らぬ歎はる
そとよ一室の慰め給へた類ひの

あら女まの果はる花と學え
いむの東はまきと云一うつり替はる
外の程を思入の世の蟬乃唐
夜くまきつ新しき一ある都
乃雲井をまきし世の雲をぬる旅を
しぞ思ひ裏へのうと云の果と云
まの氷の川へ橋をくもてよと云

思入らば如きぬ情の中は、甲カ 別は恨成乙カ
流くし雨の雨中の夕は、甲カ 流る流
つまぐを慰めんと、乙カ 襟を抱きて来
つ既は酒宴を始し、下カ 女カ 女手平此
由は酒の流敵は、乙カ 皇衛入侍
前は、乙カ 女カ 女手平此
将の、乙カ 女カ 女手平此

まはる盛は、乙カ 女カ 女手平此
いらは、乙カ 女カ 女手平此
其時、乙カ 女カ 女手平此
たは、乙カ 女カ 女手平此
乃、乙カ 女カ 女手平此
べ、乙カ 女カ 女手平此

千手

七

てらまひのまはらうらうらづのままはるま
づま果もしてなを結あがりせり都
の重房がまの慶の乃外の都り
まの世中らばあまのれ社を月
か魚降ねくるまは坂やの後のまよわ
ころあはれあもかくみも果もまで又鎌
倉の慶もあまらるるくそ八橋の雲

井た都づらまの三の國をまは
あから箱根うちすまて明もやも
まの早月あはるからま入らば
うま限うそし思ひよあられた愛
まのまのひねのま昔よとる妻の燈
暗うしてお行かまあしづの雨え
まのまのあのを 四國のま 歎のま

うちり行らぬまひの袖思ひのきこ
やぬ流涙をうけて出てもおきぬ
え乃枯くたよ花さく千手の袖あら
バカとねくらばちか入るん
樹れ蔭や一丁のきりみ
生れ縁とらまら拍をぞ飛ひま
其時ききひら興の業しく
上女 序舞

を引よ務方母 鈴もまへる
ここの絵合よ 合きてまげバ
乃松内如ひまらまきり琴を枕のみ
志らよらうたね夢も行あく
め色ほのく明わたる雲片
梅もあめぬい ちあひまもあ
しと酒宴をちかふはらうちう

千手

十終

ちかきつゝあつしやうりていへん
 たるひもかたけの諸人あつしやうりていへん
 娘から女目あつしやうりていへん
 姥と成りていへん 都多目つゝあつしやうりていへん
 もそつていへん 月結女
 ちかきつゝあつしやうりていへん
 乃女子あつしやうりていへん

下 つかれていへん
 山月のつらつらの行の船舟いへん
 娘のあつしやうりていへん
 娘のあつしやうりていへん

ちかきつゝあつしやうりていへん
 ちかきつゝあつしやうりていへん
 ちかきつゝあつしやうりていへん
 ちかきつゝあつしやうりていへん

ぎたてくさうと夏成を可人さうの
 腰がきこるさうさうも松籟を
 けしきさうさうさうさうさうさう
 へよのあなをさうさうさうさう
 乃らさうさうさうさうさうさう
 まさみさうさうさうさうさうさう
 本と結さうさうさう 早カ 綴澤山の朽木さ

こころもさうさうさうさうさうさう
 仏籟もさうさうさうさうさうさう
 けし シテ上 秋も 賦 シテ上 壘も あり たり 花
 のま シテ下 さうさうさうさうさうさう
 ねん シテ上 籟 シテ上 たり 入 シテ上 謂 シテ上 あり 又 シテ上 入 シテ上 たり
 多人 シテ上 剛 シテ上 薩 シテ上 播 シテ上 たり 候 シテ上 三 シテ上 摩 シテ上 耶
 形 シテ上 行 シテ上 自 シテ上 給 シテ上 行 シテ上 候 シテ上 形 シテ上 あり たり

地上 地水火風空 五侍五輪の人の持
付く 閻ある入まう 像をねたり
りひ昔の功德を替へ入 備うと及
乃をさくくうよ 一見卒教安永融
三聖道 一念發起菩提のうれも
あつたらんま 菩提あらあ
空のうらみあはく 空のうらみあはく

も 社をそく入 ありまは社
仏身をあらはせらあ 佛体と志
まをまうそくあはくあはくあはく
あはくあはくあはくあはくあはく
申所なる法華教傳の教をまはく
苦了らう引れた順縁をまはく
縁ありとあはく 菩提を要も

三行

觀音の慈悲 緊持の愚癡を 文

珠乃智恵 かくらふも 善あり

煩惱といふも 善扱也 善扱も

檀木とあるは 明鏡又 曇りあり

空本す来一物あり時ハ仏も前目毛

隔あり元よりをち乃凡支を救らん

鳥は方便のぶらま誓の願あれん

縁ありと浮く 怨よりせむ城に

けと然る非人ありとて僧ありを

地よりまきく 三度礼し入ハ 秋ハ此

時ちちらさし程たり事のいさむの母極

樂れうちあらんころありあそむる

何の苦いあまき 夢じり 若僧

乃きうけく 梅むといふ成

人々名をば名譽中人ミテ白をうつら

名を名譽人上とて名は出羽乃那司

小野良のつらむもあつ小町あれ

もつらむもあつ痛うもあ

小町あつらむもあつ花の像

かやま桂眉雲あつと自粉を

絶きつらむ乃衣をほりして桂殿の

同館つらむ引を續詩を

作里酔をまむもあつ月

袖は静あつまむもあつ方さぬの

し其行よ上つらむもあつ

霜蓬ヤさつらむもあつ

もあつらむもあつ

つらむもあつ

年シテのシテ夕シテらシテ勢シテたシテらシテぬシテくシテもシテ也シテらシテらシテぬ
 昔シテひシテきシテ有シテ明シテ乃シテ敷シテをシテつシテくシテまシテしシテ秋シテ牙シテ小
 首シテはシテかシテまシテたシテるシテくシテろシテよシテおシテるシテ脚シテあシテをシテ入シテ
 たるシテぞシテけシテしシテ命シテのシテ志シテらシテねシテたシテあシテのシテの
 うシテをシテたシテまシテきシテしシテとシテ粟シテ豆シテのシテかシテまシテしシテしシテを
 袋シテよシテ入シテてシテ持シテるシテよシテねシテはシテおシテるシテ袋シテよシテらシテぬ
 くのシテあシテらシテうシテまシテるシテ夜シテあシテりシテじシテらシテぬシテぬシテぬシテぬ
 破シテきシテかシテんシテかシテるシテやシテあシテれシテるシテ面シテのシテうシテりシテをシテ

ちシテらシテるシテのシテのシテかシテよシテらシテぬシテ白シテ黒シテれシテ田シテ鳥シテ子シテあシテるシテと
 破シテきシテかシテんシテかシテるシテやシテあシテれシテるシテ面シテのシテうシテりシテをシテ
 かシテまシテねシテらシテしシテまシテしシテてシテ霜シテをシテ露シテをシテ露シテ日シテのシテ露シテ
 をシテまシテまシテしシテたシテらシテしシテてシテまシテのシテ枝シテもシテ独シテをシテあシテらシテぬ
 こシテろシテのシテ路シテ頭シテよシテうシテらシテしシテはシテれシテるシテ人シテのシテ人シテのシテ人シテ
 物シテをシテこシテろシテひシテえシテぬシテ母シテのシテ悪シテいシテまシテしシテのシテ物シテをシテれシテぬ
 心シテつシテきシテてシテ聲シテかシテらシテりシテまシテしシテかシテらシテぬシテあシテのシテ物シテをシテ

たぐな^ミ法師僧あ^ハし^ハ行^ハり^ハや^ハ小町^ミ

か^ハま^ハり^ハ浦^ハり^ハあ^ハり^ハむ^ハね^ハと^ハ給^ハ小町^ミよ

行^ハと^ハて^ハ現^ハあ^ハり^ハ事^ハを^ハり^ハや^ハら^ハう^ハや^ハ

小町^ミと^ハり^ハあ^ハり^ハあ^ハま^ハつ^ハら^ハう^ハて^ハあ

あ^ハり^ハお^ハ草^ハ津^ハ方^ハの^ハ又^ハも^ハい^ハり^ハて^ハ降^ハ

五月^ニ雨^ハの^ハあ^ハり^ハ成^ハた^ハ一^ハ度^ハは^ハも^ハも

あ^ハう^ハく^ハ今^ハ百^ハ年^ハは^ハあ^ハら^ハう^ハ報^ハう^ハて^ハ意

人^ハ多^ハく^ハあ^ハり^ハ人^ハ多^ハく^ハや^ハ人^ハ多^ハく^ハ

と^ハい^ハぬ^ハあ^ハり^ハあ^ハり^ハあ^ハり^ハあ^ハり^ハあ^ハり^ハ

て^ハ省^ハそ^ハ小町^ミの^ハあ^ハり^ハあ^ハり^ハあ^ハり^ハ

中^ハも^ハ殊^ハは^ハ思^ハひ^ハ深^ハ草^ハは^ハ四^ハ位^ハは^ハあ^ハり^ハ

恨^ハま^ハの^ハ牧^ハの^ハあ^ハり^ハあ^ハり^ハあ^ハり^ハあ^ハり^ハ

通^ハる^ハ日^ハの^ハ行^ハ時^ハ夕^ハ暮^ハ月^ハ社^ハ友^ハよ

あ^ハり^ハあ^ハり^ハあ^ハり^ハあ^ハり^ハあ^ハり^ハあ^ハり^ハ

いそたしん トミテ 浄衣をばらばらしく
浄衣の袴かいらつぐそそ馬を
かささう 袴衣は袖をうちあけて
カ 人の若しの通路の月も行きまも
ゆくぬのおもゆ乃よもこの葉れ時
雨雪あり シテ上 行乃玉氷とさき
も行って海りぐりてふか一夜

二夜三夜四夜七夜 ト下 八夜のよ ト下 豊 ト下
乃明の第會もあをてうかよ
庭よりれ時をもうつん曉の榻乃
ち ト下 かま自あまるとあひいて九
十九夜よなる ト下 ち ト下 あら ト下 ち
自まひや胸らあ ト下 ち ト下 ち ト下 ち
一 ト下 あ ト下 ま ト下 ち ト下 ち ト下 ち ト下 ち

かのの其香入るし世の如く
 なおの如くも是れより
 色ほの世をぬらうまこと成まる
 沙と塔と如き心く黄の金もを
 こまやうよ花を伝よ年向つて
 のみちよりらうよ

紅葉狩

時雨と急ぐ紅葉狩
 路を尋ねて 是も汝ありて佳
 女もていふ 女も入て浮舟
 ともともぬらうも白雲の
 童律志を宿のけりまよ
 人社をぬれの集りて菊

三
 うろろきよはらふたればいと氣也
 會ミナつたてはまのまきふくもあはれを
 詠めつゝ四方の梢もあはれけり
下青 伴ひ出さる道づきのあはれも目よ
上 うしろくうちのやまのまき露や深
ニ つらつく朝の原の目白より色深
 まいれあはれをいさひのよふりて

三
 中絶せんまづこの本々よりの四
 方ノ梢もあはれけり
三 面白やなまき目せはあはれなり
 のな事もさけよ錦さけりて夕時
 むねましくも鹿ノ搦つなへきけり

多_ニく_ニ入_リたる_ノさ_キも_ト急_ニス_ル面_ノ白_クぬ_レ幾_分色_シ
 コ_ノト_ハハ_トモ_トコ_ノラ_ニラ_ニク_テ玲_々邊_ニより_テよ_リあ_らぬ_レ
 鹿_ノ跡_ヲ吹_ク涼_クの_ノ音_ハ弱_クの_ノ多_クあ_らす_ニ
 い_まあ_らじ_きな_らむ_レの_ノ聲_ハも_ト公_ニら_しも_トあ_らじ_きの_ノ
 梓_ノさ_しぐ_らしく_シぬ_レ野_ノ々_ニ薄_クあ_らじ_きあ_らじ_き行_ハ
 庫_ノの_ノあ_らじ_きの_ノ影_ノも_トあ_らじ_きの_ノ音_ハた_がし_き
 お_のれ_レま_のあ_らじ_きの_ノ席_ノに_テ拜_ムも_トあ_らじ_きの_ノ中_ニあ_らじ_き

の_ノあ_らじ_きの_ノ影_ノも_トあ_らじ_きの_ノ音_ハた_がし_き
 り_ある_ノは_ト前_ニあ_らじ_きの_ノあ_らじ_きの_ノ影_ノも_トあ_らじ_きの_ノ音_ハた_がし_き
 つ_く人_ノ影_ノも_トあ_らじ_きの_ノあ_らじ_きの_ノ影_ノも_トあ_らじ_きの_ノ音_ハた_がし_き
 と_書て_まり_入る_ノあ_らじ_きの_ノあ_らじ_きの_ノ影_ノも_トあ_らじ_きの_ノ音_ハた_がし_き
 ま_まに_あら_じき_のあ_らじ_きの_ノ影_ノも_トあ_らじ_きの_ノ音_ハた_がし_き
 屏_ノの_ノあ_らじ_きの_ノあ_らじ_きの_ノ影_ノも_トあ_らじ_きの_ノ音_ハた_がし_き
 狐_ノの_ノあ_らじ_きの_ノあ_らじ_きの_ノ影_ノも_トあ_らじ_きの_ノ音_ハた_がし_き

^{タビ}寝る^{オン}は^{カタ}方^ナと^ナ討^ナかる^ナ

此^カれ^{ホト}は^{ホト}は^{ホト}あ^{ホト}ら^{ホト}ひ^{ホト}の^{ホト}思^{ホト}ひ^{ホト}も

よ^{ホト}ら^{ホト}ひ^{ホト}の^{ホト}思^{ホト}ひ^{ホト}も

如^{ホト}し^{ホト}な^{ホト}ら^{ホト}ひ^{ホト}の^{ホト}思^{ホト}ひ^{ホト}も

馬^{ホト}よ^{ホト}ら^{ホト}ひ^{ホト}の^{ホト}思^{ホト}ひ^{ホト}も

一^{ホト}に^{ホト}は^{ホト}あ^{ホト}ら^{ホト}ひ^{ホト}の^{ホト}思^{ホト}ひ^{ホト}も

づ^{ホト}に^{ホト}は^{ホト}あ^{ホト}ら^{ホト}ひ^{ホト}の^{ホト}思^{ホト}ひ^{ホト}も

教^{ホト}あ^{ホト}ら^{ホト}ひ^{ホト}の^{ホト}思^{ホト}ひ^{ホト}も

志^{ホト}に^{ホト}は^{ホト}あ^{ホト}ら^{ホト}ひ^{ホト}の^{ホト}思^{ホト}ひ^{ホト}も

禁^{ホト}に^{ホト}は^{ホト}あ^{ホト}ら^{ホト}ひ^{ホト}の^{ホト}思^{ホト}ひ^{ホト}も

^早上^{ホト}に^{ホト}は^{ホト}あ^{ホト}ら^{ホト}ひ^{ホト}の^{ホト}思^{ホト}ひ^{ホト}も

是^{ホト}に^{ホト}は^{ホト}あ^{ホト}ら^{ホト}ひ^{ホト}の^{ホト}思^{ホト}ひ^{ホト}も

平^{ホト}に^{ホト}は^{ホト}あ^{ホト}ら^{ホト}ひ^{ホト}の^{ホト}思^{ホト}ひ^{ホト}も

^{奥ノコト}
 の入る便なまのつらうー^早
 ら^{オシ}
 情あのはり^サ村雨乃あぬ宿り
 樹の蔭^サのまりて^日行乃流
 き^サの酒^サを^スいで^サ見^スて^スは^ス
 つらうー^中年^冬孩^元の^トを^トが^トり

留^サし^スて^スは^スも^トあ^トら^トば^トし^トら^トば^トは^トし^トら^トば^ト
 又^スく^スも^スさ^スる^ス可^スき^ス山^ス路^ス乃^ス菊^スの^ス酒^ス
 竹^ス乃^ス昔^スの^スあ^スら^スう^スは^スも^スな^スも^スな^スも^スな^ス
^鹿出^スる^スも^スい^スづ^スか^スは^スら^スず^スに^ス入^スる^ス
 情^スの^ス益^ス乃^ス深^スき^ス葉^ス乃^スの^ス模^スと^スう^スや
^サ林^ス乃^ス酒^スと^スあ^スら^スう^スは^スも^スな^スも^スな^スも^スな^ス
 七^ト乃^ト酒^ト乃^ト自^ト然^ト乃^ト所^ト乃^ト心^ト乃^ト上^ト

たけのこ 湯がく 油も 紅葉 夜乃
くわが 井 深き 水乃 此 世 人
た 思ひ まの 胸 うち ちわく 詩 ちり
うさ 船 舟 入 心 なる こと 行 乃
葉 の づ 詩 なる こと 思ひ
かき も 盃 司 かり なる こと 思ひ
る ぬ ぬ 道 へ 橋 ぬ ぬ 思ひ ぬ ぬ

飲 酒 を ち づり ぬ ぬ 邪 念 誦 ぬ ぬ
た ぬ ぬ 心 乃 花 乃 づら かり ぬ ぬ
世 子 ぬ ぬ たら ぬ ぬ あり ぬ ぬ 山 様 ぬ ぬ
か ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
と ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
ま 情 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

そ頼みゆく事とせむるもをうれ
うもつもきよ人の心もきらきら
まづらるる電きらあかくて時刻も
うらうらふく雲の影のきこもちり散
かまらまの首城の神乃契りの
よるらまきて月の影はも袖もをを
めぐらしたたけに紅葉の中を紅

終

六

葉青苔の地垣に紅葉をいたの地
又見涼の書かくるよあちり
くお花のにおひまの影は月影
程のうたねよかき袖もつねふ
あー夢がー鈴あふ
早よ
あからまもや秋あがらの雲れ酒の
酔ひまらちの影もあは中よあら

中末序

かゝるを鬼に引ひまきとく鬼の
まんありし通ひ可を頭をつむ
てあがらんともまるを切らひ給へ
弼よ忍れていをまへのあつを引
ろしけりし一忽鬼神をまきつぐへ
給よ威勢は程こそみろろまき

246
4
188

復製不許

明治參拾貳年六月廿五日從
同 參拾四年一月廿八日迄
同 四拾參年四月二十五日 再版御届
出版御届濟

訂正者 觀世清



發行兼
印刷者

檜 常 之



印刷所

江 川

堂

京都市上京区二條通麩屋町角
東京市四谷區傳馬町貳丁目

